**聖霊降臨節第12主日　諏訪教会創立114周年記念礼拝　　　　　　　　2024年8月4日**

**「十字架と復活」**

**詩編34編9節**

**34:9 味わい、見よ、主の恵み深さを。いかに幸いなことか、御もとに身を寄せる人は。**

**使徒言行録17章1～9節**

 **17:1 パウロとシラスは、アンフィポリスとアポロニアを経てテサロニケに着いた。ここにはユダヤ人の会堂があった。**

 **17:2 パウロはいつものように、ユダヤ人の集まっているところへ入って行き、三回の安息日にわたって聖書を引用して論じ合い、**

 **17:3 「メシアは必ず苦しみを受け、死者の中から復活することになっていた」と、また、「このメシアはわたしが伝えているイエスである」と説明し、論証した。**

 **17:4 それで、彼らのうちのある者は信じて、パウロとシラスに従った。神をあがめる多くのギリシア人や、かなりの数のおもだった婦人たちも同じように二人に従った。**

 **17:5 しかし、ユダヤ人たちはそれをねたみ、広場にたむろしているならず者を何人か抱き込んで暴動を起こし、町を混乱させ、ヤソンの家を襲い、二人を民衆の前に引き出そうとして捜した。**

 **17:6 しかし、二人が見つからなかったので、ヤソンと数人の兄弟を町の当局者たちのところへ引き立てて行って、大声で言った。「世界中を騒がせてきた連中が、ここにも来ています。**

 **17:7 ヤソンは彼らをかくまっているのです。彼らは皇帝の勅令に背いて、『イエスという別の王がいる』と言っています。」**

 **17:8 これを聞いた群衆と町の当局者たちは動揺した。**

 **17:9 当局者たちは、ヤソンやほかの者たちから保証金を取ったうえで彼らを釈放した。**

1.

**私たちの教会の礼拝堂には玄関近くの右下のところに「定礎2008年9月」と記されたプレートがあります。それはこの会堂が2008年に建てられたものであることを現しています。そのプレートにはもう一つのことが記されています。それが「創立1910年」という文字です。この会堂は2008年に建てられたけれども、諏訪教会の創立は1910年であること、それは100年以上の歴史のある教会であることを教会に来る人や近くを通る人などに証しをしているのです。**

**本日は諏訪教会創立114周年記念礼拝です。教会創立の1910年8月1日、その日から神様の恵みによって114年を迎えることができたことを記念する礼拝です。当時は諏訪日本基督伝道教会所という名前で、会堂もこの場所ではなくて新小路（しんこじ）にありました。そしてこの諏訪の地に福音が伝えられたのはさらに23年前の1887年のことです。オランダ改革派のジェームス・バラ宣教師と稲垣信（あきら）牧師が上田の地から旧中山道の中でも最大の難所と言われていた和田峠を馬で越えて下諏訪の地に入り福音を宣べ伝えたのです。東海教区史の諏訪教会の紹介の文章によると、「たぶん、路傍伝道であったと思われる。これが諏訪地方における最初のキリスト教伝道である。」と記されています。諏訪大社への信仰が根強いこの諏訪の地域で外国人宣教師と日本人牧師が会堂も何もない道端で福音を宣べ伝える、それがいかに困難なものであるかは容易に想像がつくと思います。どんなに熱心に語っても聞いてもらえなかったかもしれません。それどころか罵声を浴びせられたかもしれません。何か物を投げつけられたかもしれません。それでもバラ宣教師と稲垣牧師は道端でイエス・キリストの十字架と復活の福音を語り続け礼拝を続けたのです。**

**やがて、下諏訪の立町（たつまち）に集会所を定めて伝道の足を伸ばしていくのです。諏訪の地に福音をなんとしてでも伝えたいバラ宣教師と稲垣牧師の熱い信仰と、何よりも聖霊の導きによって諏訪の地に福音が広がっていき1891年には講義所が設立され、1910年に諏訪日本基督伝道教会所が主の恵みによって設立し、諏訪教会の創立へと導かれたのです。**

**新小路から柳町の会堂へ、さらに現在の会堂へと教会の場所は移りました。教会の歩みの中で幾多の困難がありました。戦後すぐには分裂という悲しい出来事も経験しました。ここ数年は新型コロナウイルスの流行により諸集会を自粛せざるを得ないこともありました。教会の歩みが決して順調な歩みを進めて来たかというと決してそうではないと思います。**

**それでも、いえそれだからこそ教会は変わらずに大切にしていることがあります。それが主の日ごとの礼拝です。どんなに時代が変わっても、私たちを取り巻く状況が変わろうとも、また教会がどんな困難におかれても、私たち教会は何よりも礼拝を大切にして歩んできたのです。礼拝において主の十字架と復活の御言葉が語られ、御言葉によって力が与えられて、それぞれの生活の場へと遣わされていく。私たちの信仰の先達たちが困難な状況にあって命を懸けて大切にしてきた礼拝を今も私たちは何よりも大切にして信仰の歩みを進めているのです。**

**今年3月に天に召された姉妹が召される少し前まで諏訪教会の礼拝に出席することを望んでおられました。「教会に行きたい。礼拝に行きたい。」何よりも礼拝を大切にして歩んでこられた姉妹の信仰の姿が、私たちの教会の姿を表していると思うのです。礼拝においてイエス様の十字架と復活による罪の赦しと愛、さらには永遠の命が語られて、こんな罪深い小さな私でも愛されて生かされている、死の先になお希望がある、その恵みの中を姉妹は感謝を持って歩んでおられました。だからこそ礼拝に行きたい。説教を聞きたい。共に主の恵み深さを味わいたい。**

**「十字架と復活」これが本日の教会創立114周年記念礼拝の説教題です。代々の教会が最も大切なこととして語り伝えてきたことです。礼拝において説教者によって語り続けられ、会衆によって聞き続けられてきたことです。それは本日の聖書箇所において使徒パウロによって語られているのです。**

**第二次伝道旅行はフィリピからテサロニケへと進んでいきました。この町はマケドニアの首都であり非常に大きな町です。フィリピとは異なってユダヤ人が多く住んでいてユダヤ教の会堂がありました。パウロたちは他の町での伝道でもそうしているようにユダヤ人の多く集まっている会堂で3回の安息日に渡って聖書を引用して論じ合ったのです。当時の聖書は私たちの言う旧約聖書しかありませんので、パウロは旧約聖書から説教をしたということです。どんな説教をしたかというと3節に記されている内容です。**

**「メシアは必ず苦しみを受け、死者の中から復活することになっていた」と、また、「このメシアはわたしが伝えているイエスである」**

**聖書に記されているメシア・救い主は必ず苦しみを受ける。私たちの罪を背負って十字架につけられて苦難を受けて死ななければならない。それは神様がお決めになった必然のことである。そして、死で終わりではなくて死者の中から復活して死を打ち破って下さる。それも神様がお決めになった必然である。そしてそのメシア・救い主は私が伝えているイエスに他ならない。つまりイエス・キリストの十字架と復活は旧約聖書に証しされていることをパウロは力強く説教をしたのです。**

**3節の終わりには「説明し、論証した」と記されています。この「説明する」は「解き明かす」という意味の言葉です。御言葉の解き明かしであり、それは真実を明らかにすることです。そして「論証する」は「教えなどを述べる」とか「証拠を挙げて論述する」という意味があります。「イエス様の十字架と復活はちゃんとここに記されているでしょ」とその聖書箇所を挙げて論述をするということです。さらに、この「論証する」と日本語で訳されている言葉のもとの言葉の意味を調べると「委ねる」という意味もあるのです。「論証する」と「委ねる」とは似ても似つかないような意味の言葉ですが、元の単語には「論証する」と同時に「委ねる」という意味があるのです。そして実はこの「委ねる」というのが大事なことなのです。**

**「委ねる」この単語が聖書の別のところで使われています。それはイエス様の十字架の場面です。ルカによる福音書23章46節です（159頁）。**

**「イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。」**

**イエス様が十字架上で最後に叫ばれた言葉「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」この「委ねます」がさっきの「論証する」と同じ単語なのです。**

**それはどういうことかと言いますと、「論証する」は「ここにこうこう書いてあるから私はこう言うのですよ。」といったどこか自分の力で相手を説得させるといったニュアンスがある言葉だと思います。弁が立つ人が相手に「ノー」と言わせないほどやり込める。どことなくそんな感じがします。パウロは決して弁が立つ方ではなかったようですが、それでも旧約聖書を引用してイエス様の十字架を論じて相手を説得させる、そんな印象を私たちはここを読んで持ってしまうかもしれません。**

**けれども、ここの箇所が言いたいのは「委ねる」なのです。神様に委ねて御言葉を解き明かすということです。神様が必ず彼らの心を開いて下さり、御言葉を聴く者へと変えられて、イエス様との出会いが起きて、信仰の告白に導かれる、そのことを信じて神様にお委ねして解き明かすのです。相手を信じさせよう、自分の力で何とかしようではなくて、神様が働いて下さることを信じて、神様にお委ねして十字架と復活の御言葉を解き明かすのです。それこそが伝道なのです。**

**パウロが語る十字架と復活の福音の言葉を聞いた人たちの心を神様は開いて下さいました。主が働いて下さり、ユダヤ人の中のある者に信仰が与えられました。多くのギリシア人やかなりの数のおもだった婦人たちも同じように信仰が与えられてパウロとシラスに従ったのです。ただ、頑ななユダヤ人たちは暴動を起こしてヤソンというパウロたちの仲間の家を襲い、「ヤソンがパウロたちをかくまっている」と彼を町の当局者たちのところに引き立てたと記されてあります。ねたみという人の思いに支配される時、人は神様の言葉を聴くことができなくなり、先週の箇所で言いますならば罪の奴隷になってしまうのでしょう。**

**神様を礼拝し、聖書に基づいてイエス・キリストの十字架と復活の福音が語られる、それこそが代々の教会が2000年に渡って最も大切なこととして歩んできました。神様が働いて下さることを信じて、神様にお委ねして、御言葉が礼拝で語られてきました。パウロが神様に委ねて説教をしたように、バラ宣教師も稲垣牧師も神様にお委ねして神様が働いて下さることを信じてこの諏訪に地に福音を宣べ伝えに来たのです。それは後の牧師達も同じ思いでイエス様の十字架と復活の福音を語り続けて、また私も同じ思いで語っています。そこにこそ真実があり、そこにこそ救いがあり、命があり、希望があるからです。主が働いて下さる。**

**来週も礼拝があります。再来週も礼拝があります。その先も毎週毎週私たちは神様を礼拝していきます。これからも礼拝を大切にする歩みを進めていくのです。その礼拝において聖書に基づいてイエス・キリストの十字架と復活の福音が語られてゆくのです。神様にお委ねして神様が働いて下さることを信じて。聞く私たちの心に神様が働いて下さり、イエス様の十字架の死がこの私の罪のためである。私のためにイエス様が十字架に掛かって死んでくださった。こんな私を愛して下さっている。そして死から甦って下さり、永遠の命がこんな私に与えられている、その大きな恵みを私たちは毎週の礼拝で気づかされて歩むことができるのです。この後共にあずかる聖餐の中で主の恵み深さを味わいましょう。**